



TITLE:

梵網經諸本の二系統

AUTHOR(S):

船山, 徹

CITATION:

船山, 徹. 梵網經諸本の二系統. 東方學報 2010, 85: 179-211

ISSUE DATE:

2010-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/131786>

RIGHT:

梵網經諸本の二系統

船 山 徹

東アジア佛教史とりわけ大乘菩薩戒の成立と發展に絶大な影響を及ぼし續けて今にいたる『梵網經』。本稿は梵網經研究の一環として、その版本問題を取り上げてみたい。

現代の佛教文献研究者が大正新脩大藏經や各種木版大藏經をもちいて原典を讀む際に直面する事柄として、どの版本がテキストの原形に近いかという問題がある。とりわけ比較的早い時代に成立した經典の場合、現在われわれが通常参照し得る最初期の木版大藏經の成った十二ないし十三世紀頃との間には數百年間の隔絶がある。その間に原形が何らかの變化を被りつつ書寫された可能性を考慮するとき、われわれが現在實見し得る版本をすべてならべて比較したとしても、そこからテキストの原形を知ることが容易ではない。相違はしばしば一字、二字という極小レベルで現れるが、一方、『梵網經』の場合は、諸本に顯著な相違が認められ、版本問題を考える上で、事例研究として一つの格好の視點を與えてくれる。

第一節 梵網經諸本の概観

『梵網經』は、高麗版や金藏版に従うならば、詳しくは『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品卷第十』といい、上下二卷からなる。ただし單に『梵網經』とのみ記す文献も多く、また、より古い時代には「心地戒品」ではなく「心地品」と表記していた。本經は後秦の鳩摩羅什譯と伝えられるが、他方、翻譯經典ではなく疑經（僞經）とみなす佛典目録も存在した。その早期の例として隋の法經等撰『衆經目錄』（法經錄）卷五がある（大正五五・一四〇上）。現在最も有力な説は中國成立説であり、それは望月信亨氏の研究によりほぼ決定的な形で論證され、その後の研究者によって檢證支持されている。^①

現在最もよく用いられるのは大正新脩大藏經本、すなわちその二四卷に目錄番號一四八四として收めるテキストである。用いられた底本（大正藏本文として載録）と對校本（脚注の校勘）は以下の通り。年代は各版の一般的成立年を示す。

底本 高麗版大藏經再雕本 一二五一年完成 『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒本卷第十』上、下

校勘 宋——思溪藏版 一二三九年完成 『佛說梵網經』菩薩心地品上、下（元本以下も題名は同様）

元——普寧寺版 一二九〇年完成

明——嘉興藏版 萬曆十四年（一五六六）開板

宮——南宋・開元寺版（宮内廳書陵部藏）^② 十二世紀中頃

このほか、現存諸版本のうち比較的早期のもので閱覽可能なものとしては、『中華大藏經』二四に收める金藏廣勝寺本（目錄五七五番）と、『影印宋磧砂藏經』に收める磧砂版がある。前者は十二世紀中頃の成立であり、後者は南宋から元にかかる。また前者は、『高麗版』と同系統に屬する、より早期の版本であり、史上初の木版大藏經である北宋の開寶藏の流れを汲む（ちなみに本經開寶藏版の現存は確認されていない）。金藏版は尾題に「梵網經菩薩心地品卷下」とあり、「戒」字を缺く。他方、

磧砂版は思溪藏版⁽⁵⁾や普寧寺版と同系統の別本である。本經の場合、大正藏校勘に示される「宋」本すなわち思溪藏版の字句と、磧砂版のその間には、相違が認められる。すなわち磧砂版の讀みが思溪藏版とは異なり、普寧寺版ないし嘉興藏版等と一致するケースも認められる。なお思溪藏版、普寧寺版、嘉興藏版は、筆者は實見していない。

木版としてはこれ以外にも明の永樂北藏、南藏や清の乾隆版などがあるが、それらより以前の版本として、京都大學附屬圖書館谷村文庫の「梵網經盧舍那佛說心地法門品菩薩戒本」(1-23/ホ/1貴)がある。⁽⁶⁾これについては後述する。

梵網經の石刻としては房山に四點がある。以下の「」内の數字は、中國佛教協會・中國佛教圖書文物館編『房山石經』全三十冊(華夏出版社)における目録番號を示す。

〔七一〕 梵網經盧舍那佛所說心地品第十(二卷。下卷のみ) 唐 『房山石經』第二冊

〔六七四〕 梵網經(二卷) 遼金刻經(『房山石經』第一四冊所收)

〔六七五〕 梵網經菩薩戒序(別刻) 卷下 遼金 (同第一四冊所收)

〔二〇八七〕 梵網經菩薩戒(二卷) 明 (同第二九冊所收)

このうち、本經の初期の流布形態を知る上で必須の資料は、勿論〔七一〕唐刻である。これは第九洞にあり、その嚴密な刻經年代に定説はない如くである。林子青氏は天寶年間(七四二〜七五五)とする。⁽⁷⁾一方、中國佛教協會編『房山雲居寺石經』の「圖版説明」八九頁によれば、刻經年代は不明としつつも、唐開元天寶間所刻『大般若經』等と書法風格が極めて類似する盛唐の逸品であると評する。これを承ける氣賀澤保規氏は長安年間(七〇一〜七〇五)を想定する。⁽⁸⁾

梵網經の早期の流布を知るための資料としては、このほか敦煌寫本と日本古寫本とがある。ただし本經の場合、敦煌寫本については奥書等によって書寫年代の明確なものは管見の限り殆ど皆無であることから、問題を徒に更に複雑化することを避けるため、本稿では敢えて扱わないこととする。一方、日本の古鈔本は書寫年代が比較的明らかであり、たとえば

正倉院中倉の梵網經（八世紀、上下卷一貫書寫の一卷本）のほか、東京国立博物館には紺紙金泥による平安時代前期（九世紀）の書寫と推定される重要文化財の經本があり、また京都市上京區の妙蓮寺所藏の松尾社一切經にも平安後期の經本（二卷）が收められるなど、本經の古鈔本は複數存在する。ただ古寫經の常として、それらは存在は知られるが、重要文化財指定等によって實見することに非常な困難が伴う。かかる状況のなか、本稿の準備をすすめる過程において、日本に残る本經寫本のうち殆ど最古の一つと言いつけるものを實見する僥倖を得た。それは京都国立博物館に重要文化財として藏される鈔本であり、その奥書によって、天平勝寶九歲（七五七）に書寫されたことが明確に知られる。^⑨本寫本の閲覧に当たり、京都國立博物館學藝企畫室長の赤尾榮慶氏と京都大學人文科學研究所の梶浦晉氏の御世話になったことをここに記し、兩氏に深く謝意を表したい。本寫本は卷首に「梵網經盧舍那佛說菩薩心地品第十下卷」とある一卷本である。尾題は「梵網經」である。^⑩このテキストを本稿では「京都國博本」と略稱することとする。

以上、大正藏に用いられた木版五種、その他の版本と古鈔本について瞥見した。ただし梵網經の成立を考える上で重要な古い傳承を知るための資料は以上に盡きるわけではない。注目すべきジャンルがさらに二つある。一つは梵網經を逐語的に引用していると考えられるテキストであり、もう一つは比較的早期に作られた注釋書に使用される經本の姿である。

本經を逐語的に引用する早期の文獻として三點に注目したい。第一は、ペリオ將來敦煌寫本二一九六番『出家人受菩薩戒法卷第一』である。撰者は不明であるが、「大梁天監十八年歲次己亥夏五月 敕寫／用帋二十三枚」云々との奥書から、梁天監十八年（五一九）五月に敕寫されたことが明瞭である。現存は卷一のみであるが、卷一はほぼ全體が残る。その章立ては「（前缺）序一、方便二、請戒三、羯磨四、受大威儀戒法五、供養三寶戒六、攝善法戒七、攝衆生戒八、略說罪相九、（跋文）」となっている。その第九章「略說罪相」六三〇～六八四行は、『梵網經』の引用であるところを明確に述

べていないが、實質的には同經の根幹である十波羅夷説の殆ど完全に逐語的な轉載である。六世紀初頭の健康に流布した『梵網經』の原文の一部がここに知られるわけである。本稿においてこれを引用する際は土橋秀高氏の録文における行數表記に従う。⁽¹⁾

さらに唐の道世『法苑珠林』卷八九に引く「梵網經」にも注目したい。これも十波羅夷の逐語的な引用である。我々はここに七世紀中葉の長安に流布していた本經十波羅夷説の原文を得る。さらに『法苑珠林』は、別の卷に目を轉ずるならば、いわゆる四十八輕戒を個別的に引く箇所もあり、版本による字句の違いもある。この點は第四節で取り上げる。

なお同じく唐代の資料として慧琳『一切經音義』卷四五に「梵網經盧舍那佛說菩薩心地品經二卷」の音義がある。興味深いことに「上卷無音」とあり、下卷のみに音義が付される。そこに恐らく我々は、下卷のみを重視する當時の状況を想像することが許されよう。下卷から二字の語句が十八載録され、音義が付される。そのうち三箇は現存諸本に對應しない。⁽²⁾

第二節 十波羅夷について

さて以上に述べた各種鈔本版本について、『梵網經』下卷に説かれるいわゆる十重四十八輕戒——梵網戒とも通稱される——の字句に即して、具體的な比較検討を以下に試みる。十重とは菩薩として決してしてはならない十の重罪であり、十波羅夷ともいう。それを明確な惡意をもって犯すならば、その者はもはや菩薩ではなくなり、悟りの可能性は消失する。一方、四十八輕戒は十波羅夷よりは輕罪であるが、やはりしてはならない四十八項目である。結論を先に述べる形になるが、今回の調査で明らかになった點が二つある。第一に、十波羅夷の説について諸本を比較すると、はっきりと異

なる二系統が見て取れる。第二に、四十八輕戒については十波羅夷ほど際立った相違はなく、兩系統の中間的な状態の異讀を複數確認できる。

まず十波羅夷について見る。第一節に記した諸本のうち、時代を元以前に限定したうえで古い年代に屬する資料を對象として、字句レベルで比較検討の可能なものを成立年代順にならべるならば、つぎの通り——。『出家人受菩薩戒法卷第一』略說戒相の十波羅夷、『法苑珠林』卷八九の引く梵網經、房山唐刻、京都國博本、金藏版、開元寺版、思溪藏版、高麗版再雕本、磧砂版。これら九種について以下に比較を試みる。これ以外にも普寧寺版およびそれ以後の諸本があるが、時代が下るため對象としない。同様の理由により唐刻以外の房山石經本も對象から外す。慧琳音義はテキストの具體的文章を傳えるものではないため、これも比較検討の對象から外すものとする。

さて十波羅夷の文言を一覽表によって示そう。金藏版は高麗版の項に、磧砂版は思溪藏版の項に各々の相違のみを記すことにする。表を見やすくするため一部成立順とは異なる順に排列し、諸本の相違する箇所には傍線を施し、また相違する字句中でより古い讀みと判斷し得る文字を傍線太字にした上で、比較検討の結果を一覽表にするならばつぎのようになる。

表1 十波羅夷の比較表

	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)
	P二一九六 出家 人受菩薩戒法(五 一九年)六三三	法苑珠林卷八九引 梵網經(七世紀中 葉、諸本同文)	京都國博本梵網經 (七五七年)	房山唐刻梵網經 (八世紀前半)	高麗版梵網經(附 金藏)β型	開元寺版梵網經 (大正藏梵網經校勘 記「宮」本)	思溪藏版梵網經 (大正藏梵網經校勘 記「宋」本)
	α型	α型	α型→β型	β型		α型	(附、磧砂版) α型
第一波羅夷 α型 「業」法「因」縁 〔思溪藏版作「業 報」因」縁〕 β型 「因」縁「法」業	菩薩若自殺教人殺。 方便讚嘆殺。見作 隨喜。乃至呪殺。 殺業殺法殺因殺縁。 乃至一切有命者。 不得故殺。是菩薩 應起常住慈悲心。孝 殺。是菩薩應起常 業」。乃至一切有命 者。不得故殺。是菩 薩應起常住慈悲心。 住慈悲心孝順心。 者。不得						

[illegible]

187

[illegible]

[illegible]

[illegible]

佛言わく、佛子よ、若し自ら殺し、人をして殺さしめ、方便して殺すを讃歎し、作すを見て隨喜し、乃至呪もて殺さば、殺の因、殺の縁、殺の法、殺の業あり。乃ち一切の命有る者に至るまで故に殺すを得ず。是れ菩薩は應に常住の慈悲心と孝順心を起こし、方便もて一切衆生を救護すべし。而るに自ら恣心快意もて殺生せば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

これと関連して、京都國博本の表記に用いた記號について簡潔に説明しておきたい。この寫本は墨と朱の二色で書寫さ

れている。本来の寫本は墨書され、その文字の一部を朱で訂正し、またヲコト點や若干の送り假名を示している。墨書が朱で改められている箇所は、右掲表中には「」で示し、墨書Xが朱書Yに訂正されたことはX「↓Y」という形で示している。同様に、墨書Xのつぎに朱書Yが補足されたことはX「+Y+」という形で示す。一方、墨書を朱書ではなく墨書によって訂正した箇所は同様の方式を用いて（）で示す。また墨書Xが削除を示す朱書きの符號（。）によって削除されている場合は單にXと示す。□は不明瞭の一字である。

筆者は日本古寫本の専門家でないため、寫本の情報に充分に汲みとることができないのを遺憾とするが、寫本全體を見た結果、次の點は確實であろうと思う。すなわち第一に、墨書本文が天平勝寶九歲に成ったのに對し、朱書の嚴密な年代は不明であること。第二に、墨書による訂正は多くは書寫と同時のものであるが、中には異なる手による墨書と覺しき箇所もあり、それ故、墨書の訂正すべてを天平勝寶九歲成立と見ることはできないこと。第三に、朱書中には第一波羅夷の箇所の餘白に頭注の形でつぎの文言があることが注目される。

依疏佛告／下□有若字。／異本初殺業有之／正本初殺因有之。（□は「下」「有」の間の右行間にある不明瞭の一小字）

これによれば、第一波羅夷の文の冒頭「佛告佛子」を「疏」（疏、注釋）では「佛告若佛子」に作る。そして表中に太字で示した「殺業殺法殺因殺縁」という墨書の読みは「異本」として、一方、それを訂正した「殺因殺縁殺法殺業」という朱書の読みは「正本」として示されている。言い換えれば、當該寫本に朱書を施した人物は、新しい読みであるβ型の方を「正本」と、古いα型の読みを伝える本を「異本」と稱していることが分かる。ここに我々は、朱書のなされた時代には恐らくは既に新たなβ型がスタンダードとして廣く定着していたらしき當時のテキスト情況を垣間見ることができよう。

なお朱書の年代がいつかは私には斷定できないが、朱書の一例に、第四十一輕戒の本文墨書「亦不得戒」の「戒」の左に「成」と朱書され、その頭注として「明廣疏有滅字」とあるのは注目すべきである。これは唐の明曠撰『天台菩薩戒義

疏』の當該箇所「言若無好相乃至亦不得滅者」(大正四〇・五九九上)とある箇所に對應するから、朱書者のいう「明廣の疏(疏)」とは明廣の『天台菩薩戒義疏』(大曆十二年〔七七七〕成書)を指していることが分かる。

なお「一」『出家人受菩薩戒法』が經文の「孝順心」を一樣に「孝從心」と表現する點について附言したい。年代關係よりすれば「一」が最も古い資料ではあるが、しかしそのことから直ちに『梵網經』は元來「孝從心」という表現を用いており、それが後代に「孝順心」に改められたと見ることはできない。元來の字は「順」であり、「從」は意圖的に改變された結果と斷定し得る。同じことは『出家人受菩薩戒法』五八五〜七行に引用される『菩薩地持經』にもあてはまる。元來の「皆悉隨順」(大正三〇・九一〇下)が「皆悉隨從」として引かれている。

結論を先に言えば、これは梁代の避諱を示すものである。上述のように、『出家人受菩薩戒法』は天監十八年五月に武帝の敕によって書寫された。彼自身の受菩薩戒が同年四月八日であったことを勘案するならば、五月は單に書寫のみを指すのではなく、恐らく敕寫の命が下ったのと同時か直後に本書は編まれたと見るべきであろう。敕命による以上、本書は武帝に献上されたにちがいない。その際に問題となるのがほかならぬ「順」字の使用であった。なぜなら武帝の父名は順之であったからである。これと同じ現象は梁の蕭子顯『南齊書』にも存在するのである。錢大昕『廿二史考異』卷二五・南齊書に「梁武帝父名順之、故子顯修史、多易爲從字」云々とある通りである。

なお、佛經の書寫においては一般には避諱現象は起こらない。梁の僧祐『出三藏記集』や慧皎『高僧傳』はほぼ同時期の成立であるが、「順」字を用いている。この點で極めて興味深いのは『經律異相』が「順」字を意圖的に避けている事實である。詳細は割愛するが、『經律異相』にも本來の經典の文言にある「孝順」を「孝從」に改めて載録する箇所がある(大正五三・五二下、六三上など)。そして同書に「順」の用いられないことは『出家人受菩薩戒法』と全く同様である。では兩書に共通し、他の佛書一般と異なる點は何かといえ、それが敕の關與である。『經律異相』は序に記される通り、「又た(天

監)十五年を以て寶唱に敕して經律の要事を鈔せしむ」(大正五三・一上)ものであった。

以上、要點のみを略記したが、「順」の回避は梁代佛書における避諱問題を知る上でいささか資するところがあるう。

第三節 注釋の基になったテキスト

以上によって、本經の諸本は二系統に大別され、新系統たる β 型を伝えるもののうち最も早い資料は房山唐刻であることが分かった。すなわち八世紀の初頭ないし前半には β 型は成立していた。しかしこのことは、時代の推移と共に α 型から β 型へと截然と移行したことを意味しない。それは、 β 型成立後の開元寺版等が α 型であることに端的明瞭に現れている。では、 β 型はいつ成立したのか。房山唐刻の時代より更に遡らせることは可能か。以下にこの點を考えてみたい。

本經最古の注釋は天台智者大師(智顗、五三八〜五九七)說、灌頂(五六一〜六三二)記の『菩薩戒義疏』であり、基づく經文は α 型であった。そのことは、たとえば第一波羅夷の注釋中に「殺業」「殺法」「殺因殺緣」を順に解説するくだりがあることから知られる(大正四〇・五七一中〜五七二上)。同じことは第五波羅夷の注釋からも明瞭に知られる(大正四〇・五七三上)。一方、この注釋に對する注釋である唐の天台沙門明曠の『天台菩薩戒義疏』卷上(七七七年成書)には、第一波羅夷に關して「自有殺心爲因、刀杖等爲緣、造趣方便爲法、以殺爲務名業。」(大正四〇・五八八上)、また第二波羅夷に關して「次文盜、因者、自心爲因、外助爲緣、施功造趣爲盜法、常思盜事爲務名盜業。」(五八八中)とあり、 β 型テキストに對する注釋であることを確定し得る。年代の相違によってか、同じ天台系でも所依の經本は異なるのである。

α 型に基づく注釋としては智顗のほか、新羅の義寂(七世紀)の『菩薩戒本疏』卷上(大正四〇・六六四下)、唐の崇義寺の勝莊の『梵網經述記』卷上末(續藏一、六〇、二、一一七裏上〜下、一一八表下)、新羅の太賢(法藏以後)の『梵網經古迹記』卷

下本（大正四〇・七〇三下、七〇五下）があり、基づいたテキストが α 型であることは注釋文から確定できる。なおここで勝莊の年代について簡単に觸れておくと、勝莊の傳は『宋高僧傳』卷四・唐京兆大慈恩寺法寶傳に付傳されており、それによれば、長安三年（七〇三）、洛陽の福先寺と長安の西明寺において法寶が義淨の譯場に參與した際、法寶は法藏および勝莊と共に「證義」を擔當したという（大正五〇・七二七中）。また同・慧沼傳によれば、菩提流志が長安の崇福寺にて『大寶積經』を翻譯した際、慧沼（六五〇～七一四）もそれに證義として參與し、「新羅の勝莊」が「執筆」を擔當したという（大正五〇・七二八下）。『大寶積經』の菩提流志譯の完了は七一三年である。吉津宜英氏の説によれば、勝莊の年代は義寂の後であり、そして法藏よりも以前であるとのことである（吉津氏によれば法藏の『梵網經菩薩戒本疏』には勝莊説を批判する箇所があるという¹⁹）。義寂や太賢と同様、勝莊も新羅の出身であることが以上によって知られる。

ただ、注釋を使用する際に注意すべきことであるが、現存する注釋中に引かれる長文の經文と注釋の成立年代を無批判に同一視するのは危険である。注釋自體が基づいた經文と、注釋に先だって本文として引かれる經文とは切り離して考える必要がある。義寂、勝莊、太賢の場合、注釋は α 型であるにも関わらず、そこに付される經文は β 型である。我々は、これらの現存本は經文と注釋の會本なのであって、會本の成立は注釋者本人とは無關係な後代であると知らねばならない。

かかる點をも考慮しながら注釋の内部で實際に用いられている梵網經のテキストを検討するとき、たとえば唐の法藏（六四三～七二二）の『梵網經菩薩戒本疏』卷一は β 型であることが確定的に分かる。注釋そのものの中に「謂、自殺爲因、敎他爲緣、讚歎彼法、隨喜其業」（大正四〇・六一三上）という解説が見られるからである。法藏は長安と洛陽で活躍した。法藏以後、 β 型に對する注釋に唐・濮陽沙門知周撰『梵網經菩薩戒本疏』卷二がある（續藏一、一、六〇、二一、一五七表上、一五八表上～下）。知周とは、慧沼（六五〇～七一四）の弟子であった智周（六六八～七二三）にほかならない。また法銑（七一八

（七七八）の『梵網經菩薩戒疏』があり、さらに時代を下れば、慧因、智旭、弘贊その他の明清の注釋もβ型のテキストに注釋を施したことが分かる。そもそも版本中でα型に分類し得るものは宋から元にかかる時期のもののみであり、明代以後は經本自體が専らβ型に統一されるのである。なおこれに關する與咸の注釋については後述する。

さて以上により、諸注釋中、β型に基づく經本に對する注釋は、法藏が殆ど最初であつた可能性が見えてくる。別な言い方をするならば、八世紀の初頭または前半に北方の房山雲居寺ではβ型の經本が刻經され、それとほぼ重なる時期に法藏がβ型經本に注釋を施したことが分かるが、注釋の成立は經本を前提とするから、β型テキストの成立は七世紀末に遡る可能性もある。しかし七世紀中期に長安で活躍した道世の『法苑珠林』がα型を示すことを考慮に入れるならば、β型テキストの成立は七世紀中葉にまで遡る可能性はなく、およそ七世紀後半から八世紀初頭にかかる頃にはじめて世に現れ、恐らく最初は東都西京の一帶で行われ、その後、房山にもたらされたのであろうと推測して大過あるまい。

本節を閉じる前に、問題點を一つ指摘したい。α型β型とも、その表現形式がなされた明確な理由は實は特定できないのである。經典の本文の流れからしてもα型の言い回しがとられた理由は不明である。かかる四項列擧の體例は管見の限り翻譯經典に見出すことができず、その表現を用いるべき必然性が判然としない。β型の登場について一言えることはα型における表現の非一貫性であろう。α型の場合、第一と第二波羅夷は「業法因緣」、第三波羅夷以降は「因業法緣」の形をとり、全體を通じての一貫性がない。一方、β型は「因緣法業」であり、一貫性は獲得されている。しかしやはりその意味は必ずしも明瞭でない。注釋を紐解いてもその理由は意義はあまり判然としない。

第四節 四十八輕戒について

さて以上、本稿では『梵網經』のテキストが二系統に大別されるのを見てきたが、ここに至り、話がやや複雑になる。二系統の截然たる相違は十波羅夷説の箇所では明らかであり、二系統の傳承が混じり合うことはなかったが、他方、それに續く四十八輕戒の箇所からは、二系統の更に詳細な具體的關係について少しく異なる局面が見えてくる。

第二節と類似の方法によって、以下に、本經の他の箇所の比較を試みる。本来ならばすべての文言を比較するのが最善であるが、紙數の制約にも鑑みて、『法苑珠林』に引用されている箇所に限って比較することとする。ただし一つだけ例外として第四十七輕戒説は『法苑珠林』に對應箇所がないが、既に指摘がある通り、諸本に重要な相違が見られるので、比較検討の対象に加える。また『法苑珠林』に引用のある箇所は、十波羅夷説以外は殆どが四十八輕戒の條文に關わる箇所であるが、それ以外にも十波羅夷説に先行する箇所が一箇所ある。かくして本稿では十波羅夷説導入部の一部、第一輕戒の全文、第二、第四輕戒の一部、第二十輕戒の全文、第二十六戒と第四十輕戒の一部、第四十三、四十六、第四十七輕戒の全文を比較する。實はそれ以外にも『法苑珠林』には第二輕戒の一部（大正五三・九七二中）、第四輕戒の全文（九八一中）、第五輕戒の全文（四六四上・中）と第三十八輕戒の全文（六四四中）の引用がある。ただしそれらは概して原文に忠實な引用であり、かつ諸本の間に際立った相違がないため、比較検討を今は割愛する。さらに「梵網經云」とあっても、内容が逐語的引用から大きく逸脱する場合は、これも検討対象から外す。¹⁵ なお『法苑珠林』の引用は、十波羅夷説については諸本同文であったが、四十八輕戒説の場合は高麗版（大正藏の本文）と開元寺版・思溪藏版（脚注の校勘）とでは字句に相違のある箇所があるので、それを「（一a）」「（一b）」に區別して掲載する。また残念ながらP二二九六番『出家人受菩薩戒法』における對應は存在しない。以上の方針に基づく比較検討の結果を示すならば、以下の一覽表の如くである。

表2 導入部及び四十八輕戒の比較略表

十波羅夷導入部	(一a)	(二b)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)
	法苑珠林引梵網經 (開元寺版、思溪藏版)	同(高麗版)	京都國博本梵網經 (七七五七)	房山唐刻梵網經 (八世紀前半)	高麗版梵網經(附、 金藏)	開元寺版梵網經	思溪藏版梵網經 (附、磧砂版)
佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學	佛告諸菩薩言。我 今半月半月自誦諸 佛戒。汝等一切諸 菩薩亦誦是戒。諸 佛之本源。行菩薩 之根本。若受戒者。 國王王子百官宰相。 比丘比丘尼。十八 梵天六天。庶民黃 門姪男姪女奴婢。 八部鬼神金剛神。 畜生乃至變化人。 但解法師言。盡受 得戒。皆名第一清 淨者。佛告諸佛子 淨者。佛告諸佛子 淨者。有十重波羅 提言。若受菩薩戒 不誦此戒者。非菩 薩。非佛種子。我 亦如是誦。一切菩 薩已學。一切菩薩 當學。一切菩薩今 學。已略說波羅提 木叉相貌。應當學 木叉相貌。應當學

[illegible]

<p>第二十六輕戒（部分）</p>	<p>若有檀越來請衆僧。客僧有利養分。僧房主應次第差客僧受請。而先住僧獨受請。而不差客僧。房主得無量罪。畜生無異。非沙門。非釋種姓。犯輕垢罪。</p>	<p>同上（大正五三・六〇八中）</p>	<p>若有檀越來請衆僧。客僧有利養分。僧房主應次第差客僧受請。而先住僧獨受請。而不差客僧。房主得無量罪。畜生無異。非沙門。非釋種姓。犯輕垢罪。</p>	<p>若有檀越來請衆僧。客僧有利養分。僧房主應次第差客僧受請。而先住僧獨受請。而不差客僧。房主得無量罪。畜生無異。非沙門。非釋種姓。犯輕垢罪。</p>	<p>若有檀越來請衆僧。客僧有利養分。僧房主應次第差客僧受請。而先住僧獨受請。而不差客僧。房主得無量罪。畜生無異。非沙門。非釋種姓。犯輕垢罪。</p>	<p>若有檀越主來請衆。客僧有利養分。○「非釋種姓」、磧砂作「非釋種姓」。</p>	<p>開元寺版と同文</p>
<p>第四十輕戒（部分）</p>	<p>又若欲受戒時。問言。現身不作七逆罪耶。不得與七逆人受戒。七逆者。一出佛身血。二殺父。三殺母。四殺和尚。五殺阿闍梨。</p>	<p>同上（大正五三・九四〇中） 引用に省略あり</p>	<p>若欲受戒時。師應問言。汝現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者。殺父。殺母。殺和尚。殺阿闍梨。</p>	<p>若欲受戒時。師應問言。汝現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者。殺父。殺母。殺和尚。殺阿闍梨。</p>	<p>若欲受戒時。師應問言。汝現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者。殺父。殺母。殺和尚。殺阿闍梨。</p>	<p>若欲受戒時。應問言。現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者。殺父。殺母。殺和尚。殺阿闍梨。</p>	<p>若欲受戒時。應問言。現身不作七逆罪耶。菩薩法師不得與七逆人現身受戒。七逆者。殺父。殺母。殺和尚。殺阿闍梨。</p>

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以上を見て氣づく點はいくつかあろう。いまは特に以下の四點に着目したい。

第一に、本稿第二節に十波羅夷について見た二系統の區別が成り立つ箇所がここにも複數存在する。すなわち具體的には第二十輕戒の「……講菩薩戒經律。追福資其亡者。」、第四十一輕戒の「師不與受。」と「見光華種種異相」、第四十三輕戒の「入房舍城邑宅中。」、第四十六輕戒の「……爲四衆白衣說法。」の箇所がそれぞれこれに該當する。

第二に、二系統のうち、京都國博本、房山唐刻、金藏版が古形を保持するのに對して、高麗版のみが新系統を示す場合がある。第二十六輕戒の「非釋種性。犯輕垢罪。」と「以惡心瞋心。」、第四十一輕戒の「……作教戒法師者。」と「苦到……」（ただし法苑珠林は崩れた讀みを示す）と「……道種性正法性。」がその事例である。また、これに類するものとして高麗版のみならず金藏版もまた新系統に屬する事例もある。第一輕戒の「癡心慢心」と、第二十輕戒の「故常行放生。生生受生。」、

第四十輕戒の「**卽身不得戒。**」、第四十七輕戒の「**皆以信心受戒者。**」などの箇所がこれに當たる。

第三に、金藏版や高麗版が古い傳承を示し、逆に開元寺版や思溪藏版が新しい讀みを示すケースも認められる。すなわち第二十輕戒の「以慈心故行放生業」、第二十六輕戒の「若有檀越來請衆僧」、第四十一輕戒の「得見好相。」と「習種性

長養性……」の箇所がこれに相當する。

第四に、諸本が異なる讀みを示す例として、十波羅夷導入部の「行菩薩之根本」の箇所がある。これに關する房山唐刻と金藏版は「行菩薩道之根本」（また京都國博本の朱書も同様）であり、高麗版は「菩薩之根本」に作り、「行」を缺く。

このほか、いずれの字句が古形を示すかを決めたい箇所もあるが、右の四點から、十波羅夷とは異なり、四十八輕戒の場合、系統を二つに單純分割することはできないことが分かる。そしてそのことよりも更に興味深いのは第四十七輕戒の箇所である。すなわち高麗版、金藏版、開元寺版の「亦復不聽造立形像佛塔經律。破三寶之罪」に對して、思溪藏版はその間に「立統制衆」以下六十一字を有するのであるが、房山唐刻はその中間形態とも言うべき形態を示し、さらに京都國博本の墨書部分は本文に高麗版と同じ字句を有する上に若干の訂正を同じく墨書によって行っている。

これについて注目すべきは宋の與咸（一二六三年没）による注釋『梵網菩薩戒經疏註』八の記述である。與咸はこの箇所を取り上げてつぎのように言っている。

藏疏の經本は「佛塔經律」從り下、即ちに「是破三寶之罪」に接し、中間に六十三字を闕脱す。不審し、古えに此の本有りし耶、寫せし者の脱なる耶。（續藏一、一、五九、四、三二八裏下）

「藏疏」とは唐・法藏『梵網經菩薩戒本疏』であろう。ただし「六十三字」は實態未詳である。單純に思溪藏版と同じ字句ならば六十一字または六十字（破」の前の「是」の有無を考慮した場合）であろうが、六十三字はさらに字數の多い傳承を示すか、それとも何らかの誤傳かは今は速斷できない。因みに與咸のこの注釋書は、卷四において、本稿第二節に見た十波羅夷の冒頭たる第一波羅夷について、 α 型と β 型に相當する二傳承が當時存在したことをも記している（續藏一、一、五九、三、二七〇裏下）。南宋の初め頃、與咸の活動していた寧波周邊のテキストの流布狀況が垣間見られる。

〔附論、谷村文庫本について〕最後に、京大附屬圖書館谷村文庫の梵網經に觸れておく。紙面の節約上、記述を簡略にせ

ざるを得ないが、谷村文庫本にはいくつかの興味深い特徴がある。第一に、谷村文庫本は下巻のみから成るが、本稿第二節に見た二系統を視點とするならば、その系統は β 型である。ただし房山唐刻、高麗版、金藏版のいずれとも異なる點があり、字句においてそのいずれかのみと同一と見ることはできない。第二に、谷村文庫本は經文の前に九六行から成る長文の序と偈文を有する。その最初の二三行は「梵網經菩薩戒序」と稱し、それは高麗版下卷冒頭に付される序と同文であるが、それに後續する文は『十誦比丘波羅提本叉戒本』『摩訶僧祇律大比丘戒本』等の冒頭と同文の部分と、他の文獻には見られない独自の文から成る部分とから成る。因みに、他の文獻には見られない獨自部分の一部と同じ文言が「梵網經序云」として日本の榮西『興禪護國論』（一一九八年成書）に引用されているのも興味深い（大正八〇・八下）。第三に、谷村文庫本は卷末に「梵網經菩薩戒後序」と明記される別の序を付し、それは夾注に釋僧肇の作と記されている。それは高麗版の冒頭に置かれる序と同文である。最後に、この木版本の版式が一行十二字であることも注目すべき特徴である。高麗版は一行十四字、開元寺版等は一行十七字であるから、この版式は注目に價する。なお經の本文は「梵網經菩薩心地法門品菩薩戒本」と題して開始し、「梵網經菩薩心地戒品卷下」という尾題をもって終わる。要するにこのテキストは、梵網經の初期の姿を伝えるものではなく、高麗版に近似しつつ序文の内容と形式において大きな相違をも示す興味深いものであり、本經の後代の流布の實態を知る上で注目すべき版本である。ただしその綿密な成立年代については不明な點が残る。

まとめ

本稿を通じて筆者は『梵網經』の十波羅夷の全文および四十八輕戒の一部に即して梁代から唐、そして南宋に至る時代におけるテキストの種々相とその基本的特徴を考察した。その結論を簡潔に箇條書きするならば、つぎのようになるうか。

一、本經の諸本は α 型（開元寺版、思溪藏版など）と β 型（高麗版など）の二つの系統に大別することが可能である。

二、二系統のうちで古い傳承は α 型であり、新系統である β 型の登場は、七世紀末から八世紀初頭の頃と考えられる。

三、 α 型と β 型の二系統は、四十八輕戒の個々の細かな読みについては、二系統の中間に位置するような別の字句を示すテキストもあり、また α 型の開元寺版と思溪藏版の間に相違がある場合は、開元寺版のほうが古い読みを示すことが多い。

四、開元寺版の傳える字句は概して古い傳承を反映するが、しかし梵網經の原形そのままとみなすことはできない。後代に生じた読みを示す場合もある。高麗版系統のほうに、より古い読みが保持されている事例も部分的には認められる。

五、テキストが二系統に分かれてゆく過程を具體的に知る上で京都國博本と房山唐刻はきわめて重要である。

本稿で得られた事柄はほぼ右の通りであるが、唐代の錯綜した状況をさらに詳しく知るためには、夥しい数の敦煌寫本を綿密に調査することが必須となろう。議論の混亂を避けるため、小論では敦煌寫本への立ち入りを意圖的に回避したが、現時点における筆者淺見の限りで言えば、敦煌寫本はほとんどの場合 β 型に屬し、第四十七輕戒の字句増減についてはさらに異なる傳承形態もある如くである。詳細の解明は今後の課題である。

開元寺版の成立地は福州、思溪藏版は湖州であるが、そのことから我々は開元寺版等の示す読みを専ら江南の傳統と見なすことは決してできない。なぜならそれにつながる先行諸本が唐代には長安やその周邊で行われていたからである。すなわち『法苑珠林』の編纂地は長安の西明寺であり、勝莊『梵網經述記』の基づいた經本もまた α 型であった。

大藏經諸經論中、『梵網經』ほどに高麗版系と宋版系が際立って異なる字句を示す事例は珍しい。また『梵網經』ほどに様々な古い傳承を細部にわたって古寫本や注釋書等を通じて窺い知ることのできる事例もまた他に多くはあるまい。本稿の検討結果が『梵網經』研究はもとより大藏經研究の進展に聊か資するところがあれば幸甚である。

注

- (1) 望月信亨『疑似經と偽妄經——仁王經、梵網經、瓔珞經、』『佛書研究』三三、一九一七年。『淨土教の起源及發達』、共立社、一九三〇年、一四〇～一九六頁。『佛教經典成立史論』、法藏館、一九四六年、四二五～四八四頁。
- (2) 望月說を支持する研究としてつぎも参照。大野法道『大乘戒經の研究』、理想社、一九五四年、二五二～二八四頁。これらを含む『梵網經』研究史の梗概については次の小論にまとめたことがある。拙稿「疑經『梵網經』成立の諸問題」、『佛教史學研究』三九一、一九九六年。
- (3) 本經の「宮」本が開元寺版であることは、『圖書寮漢籍善本書目』附録〈大藏經細目〉(宮内省圖書寮、一九三〇年)四四頁より知られる。なお、宮本に對する大正藏校勘には誤りも含まれる。その例として表1、表2の☆を付した箇所を参照。
- (4) 重要な版本として福州東禪寺版が検討對象となろうが、本經の場合のその存在所在を筆者は現時點で確定できていない。同様に高麗版初雕本梵網經の存在も知られていない。
- (5) 一般に思溪藏版には思溪圓覺禪院版(前思溪藏版)と思溪法寶資福禪寺版(後思溪藏版)の二種があり、大正藏の校勘に用いられた増上寺藏本はこれら二種の混合藏であるとされる。金山正好(編)『増上寺三大藏經目錄解説』、増上寺、一九八二年、一六頁。
- (6) 谷村文庫本は、現在の装幀では表紙に「宋揚梵網經菩薩戒本」とある。元來は高山寺に藏されていたことが知られている。先行研究としてつぎを参照。大槻信「京都大學所藏の高山寺本——書物と目錄」、『靜脩』三九四、二〇〇三年。
- (7) 林子青「唐代房山石經刻造概況」、『名山石室貝葉藏』、臺北、法鼓文化、二〇〇〇年(論文の初出は一九五八年)。
- (8) 中國佛教協會編『房山雲居寺石經』、北京、文物出版社、一九七八年、八九頁(圖版番號二三、二四、二五)。なおこれを承けて氣賀澤氏もそのまゝ同說に従っている。氣賀澤保規「唐代房山雲居寺の發展と石經事業、附 房山石經山洞窟所藏隋唐石經一覽表」一九八頁、同編『中國佛教石經の研究——房山雲居寺石經を中心に』、京都大學學術出版會、一九九六年。なお表中には本經刻年を「長安間」と想定するが、そのように特定する根據が明記されているわけではない。
- (9) 奥書は「天平勝寶九歲三月廿五日/知識願主僧靈春/沙彌願戒 日置石萬呂/土師留女/土師曰萬呂/土師廣萬呂」。
- (10) 卷首に高山寺朱印が認められ、卷末には、上記奥書の後に紙を繼ぎ足して、「天保六年歲次己未十一月一日奉修補了/高山禪念沙門慧友僧護(享年六十一)施主能州沙門凝然法師也」とある。
- (11) 土橋秀高「ペリオ本「出家人受菩薩戒法」について」、『戒律の研究』上卷、永田文昌堂、一九八〇年(論文の初出は一九六八年)。ただし本稿で引用するに當たり、寫本に即して録文の文字や句讀を改めた。
- (12) 『一切經音義』卷四五「摩醯」「眡其」「鈺子」(大正五四・六〇七中)。このうち「摩醯」は「摩醯首羅」に對應するかもしれないが音義中の配列位置に問題がある。「眡其」は「視他」(大正二四・一〇〇八上一行)に對應するか。「鈺子」は「鍾子」(大正二四・一〇〇八上一行)に對應するかもしれないが配列位置に問題がある。なお唐代音義書の場合、現存諸本と對應しない語句は様々な經典文言について生じ得る。それ故、對應が見られないことから直ちに當該音義の基づいたであろうテキストを成立當初の原テキストそのものであると斷定することには問題のある場合もある。以下の拙論を参照。吉川忠夫・船山徹『高僧傳(一)』、岩波文庫、二〇〇九年、「解説」四三三頁。
- (13) 本稿に記す α 型と β 型のうち、房山唐刻が後者に屬するものである點は、一九七八年刊『房山雲居寺石經』にも簡略に指摘されている。
- (14) 吉津宜英「華嚴一乘思想の研究」、大東出版社、一九九一年、特に五九三頁注三五、六一五頁。
- (15) 第四十七輕戒における版本の相違は、望月信亨氏(本稿注一)によつ

(16)

て注目され、その後、坂本廣博氏が專論を公表している。坂本廣博『梵網經』第四十七輕戒に關するメモ、『大久保良順先生傘壽記念論文集、佛教文化の展開』、山喜房佛書林、一九九四年。ただしその行論および結論には筆者の見解と異なるところが少なくない。

『法苑珠林』における本經への言及箇所のうち、四三三上、四三二中、九三九中夾注、九四一上、九四二上は逐語的引用でないので表2から

除外した。ただし九三九下には「梵網經に云く」として受戒法を述べる箇所があり、それは現存本と全く對應しない。この點をどう見るかは今後の課題とし、今ここでは問題提起にとどめておきたい。またこの箇所に續いて九三九下にはさらに二條、梵網經を引用するが、そのうち、一は第四十輕戒の一部に對應する非逐語的引用、他は第一輕戒に對應する逐語的引用である。後者については本文表2に記載した。